

## 教壇に立って 35 年間、今思うこと

応用物理学科 高木 丈夫

4 年前に、応用物理学科の優秀教員候補者名簿からの削除を申請して、この場で卒業宣言をした。その後も同じ名簿が使われていると思っていたが、そうではなかったようだ。というわけで、4 年ぶりの受賞となった。優秀教員の選出が始まって 2 年目の 2001 年に受賞したが、そのときに「定年近くになったら、若い教員と競ってみるのも面白い。」と書いた。まあ、それを実行したということなら、今回の受賞も許されると思う。

今度の 3 月で定年退職となるが、授業方針は「旧帝大の授業と同等のレベルのものを解りやすく」としてやってきた。もちろん同等のレベルの内容を地方大学で話すのなら、授業の仕方には、多くの工夫が要る。まあそこが、腕の見せ所というわけだ。教室の前半分に座っている学生の表情を観察していたら、どこで迷子になったかはすぐに分かる。教室の後ろ半分は多くの場合、関心を示していないので観測の対象とはしない。優秀教員選挙に関わった限りでは、応用物理学科の場合は比較的票が分散するため、3 割程度の票を集めると当選する傾向に在る。いろいろ学生と話をしてみると、最上位成績者の 3 割の票を集めて当選を重ねたようである。そして、このような授業をすることが、自分に対しては求められている方向だったようだ。

さて、教室の後ろ半分の学生達に関心が無いわけではなかった。一度、徹底的に初等的な所から解説して理解できない学生をケアしたことがある。そうしたら授業終了後に、十数人の学生に取り囲まれて、「もっと効率的に授業すること。大学で、中学レベルからの授業を求めているわけではない。」との抗議を受けた。まあ、そうなるよねえ。そのため、下位クラスの受講者のみに参加資格を与えて、(基礎数学で達成度別クラス編成を行っていたところである。)学科時間割の空いたコマに教室を借りて、何でも質問ができるようにしたことがある。ところが学生は一人として来ないのだ。結局 8 週間続けてみて、余りにアホらしくなり、来訪者ゼロのままこの企画を閉じた。これには、後日談があり、上位クラスの学生から「今度は上位クラスへの授業を行って欲しい」と言われ実際に実施してみると、それなりに盛況であった。やはり、無駄になる努力はしないほうが良い。結局、学問的に関心の薄い層に対する対処方法は、35 年間、見つけられなかったことになる。

思い返してみても、一番楽しかったのは、30 歳代前半に、他学科で基礎数学を教えていて、授業の最後の 30 分間、その場で請われるままに、専門科目の疑問点をゲリラ授業として教えていた頃である。電磁気学、複素関数論、回路理論、量子力学など場当たりのにはあるが、十分に楽しみながら教えることができた。

しかしながら、そうこうしているうちに、「シラバスを書け。」という指示が降りてくるようになる。大学の授業なんて、教えるべき大枠が決まっていたら、後は学生の状況を見て、不足している部分は、他の科目であろうと補いながら、教程を前後しながらでも進めていけば良いものと考えていただけに、これは極めて不快であった。更に、達成度別クラス編成や、学科を二分割しての授業も行われるようになり、好き勝手な(創意工夫をした?)授業も出来なくなった。低いレベルで合格させることは絶対にイヤなので、必ず行っていた救済試験もやれなくなった。成績が中位から下位の学生は、救済試験までの間に集中して勉強するもので、その効果は絶大だったのだが...。そして、ある程度自由に授業ができるのは、単独クラスである自学科授業のみとな

ったのである。最近の大学の状況と、自分の主義とのズレを感じてきて、確かに、もうこの辺が引き際なのだろう。

西田幾多郎の退職の辞であるが、

「その前半は黒板を前にして座した、その後半は黒板を背にして立った。黒板に向かって一回転をなしたといえば、それで私の伝記は尽きるのである」

というものだ。学生時代に読んで、カッコ良いと思ったものである。

自分の場合は黒板を前にして、座る時間は短かった。自分で学んだほうがマシという授業が結構多かったこともあり、自宅や図書室の机に向かうことの方が遥かに多かった。一方で黒板を背にした時間は随分多かった、同僚の都合で引き受けたコマも多く、大学院まで含めて 19 種類の授業を担当したことになる。一番多いときは週に 6 コマの授業を持った。こちらの方は、それなりに精進したつもりではある。黒板に向かって一回転の回転対称性は歪ではあるが、これはこれで良かったのではないかと思う。教壇に立つのは嫌いでは無かったし、ある種の保存則が成立して、黒板に向かわなかった分の、報いなのかもしれない。